明治・大正・昭和の時代を経て

・・・・・遺された歴史の足跡・・・・・

内部の近代歴史遺産

うつべ町かど博物館

内部の近代歴史遺産

＜番外＞四日市測候所
消滅
①横井井堰・顕彰碑
②内部線延線跡
③東海道旧内部橋橋台跡
④山の手配水池（水源施設）
⑤内部川旧堤防跡
⑥旧内部学校跡
⑦服部泰次郎道標
⑧内部簡易水道跡（水源施設）
⑨装荷線輪用櫓
波木
見家
采女城跡
采女
北小松
南小松
小古曽
波木が丘団地
波木南台団地
采女が丘団地
内部川
足見川
采女川
小池川
杖衝坂・芭蕉句碑

はじめに

古から人々の営みが紡がれ、歴史に育まれてきたわが町内部。そこには杖衝坂や采女城跡をはじめとする多くの史跡・遺跡がのこされています。これまでに、これらを伝える郷土史や歴史冊子が残されていますが、その多くは神社仏閣を中心とする江戸時代以前の事柄がほとんどで、明治以降の事蹟を取り上げたものは多くありません。

明治以降という近代の視点で地域を見直してみたとき、内部には意外に多くの遺蹟・遺物が残っていることに気が付きます。それらの多くは普段見慣れた景色の中、気づかれないままひっそりとそこにあります。百数十年という短い時間だからこそ今に残っているこれら遺跡も、やがて消滅し、時の中に埋もれてゆく運命にあります。

明治・大正・昭和の時代をつうじて、人々の生活を支え、内部の発展に貢献したこれらの遺跡に光をあて、広くみなさんに知ってもらい、後世に伝えるために、うつべ町かど博物館では独自にこの時代の遺跡の中から９件を選び、「内部の近代歴史遺産」の名前を付して冊子にまとめることにしました。

この冊子が内部の歴史に関心を寄せ、故郷を愛する気持ちを育む一助となることを願っています。

目次

1. 横井井堰および顕彰碑・・・・・・・・・1
2. 内部線延線跡・・・・・・・・・・・・・ 3
3. 東海道旧内部橋橋台跡・・・・・・・ 5
4. 海軍燃料廠山の手配水池・・・・・・ 7
5. 内部川旧堤防跡・・・・・・・・・・・・ 9
6. 旧内部学校跡・・・・・・・・・・・・・11
7. 服部泰次郎道標・・・・・・・・・・・・13
8. 内部簡易水道跡・・・・・・・・・・・・15
9. 装荷線輪用櫓・・・・・・・・・・・・・17
番外. 四日市測候所（消滅遺産）・・・・・ 19

１．今なお恩恵を受ける・・・横井井堰および顕彰碑

概要

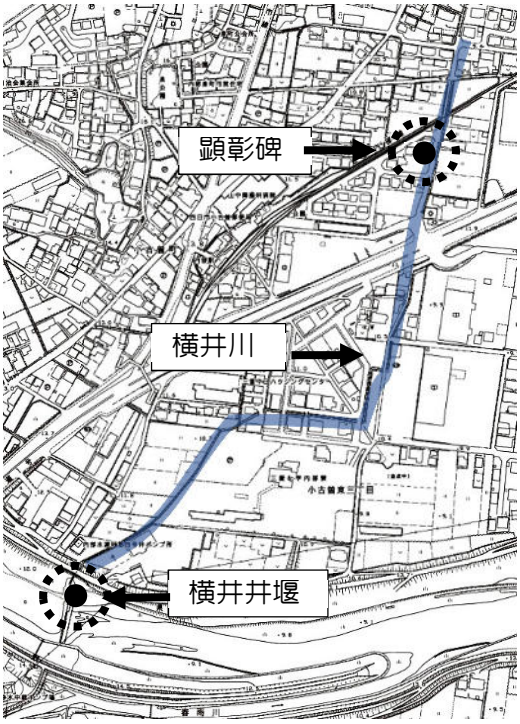
江戸時代、内部川に堰を作り小古曽の田に灌水する大工事があった。堰は同じ場所に形を変えて今も残り、取り込まれた水は大地を穿ってつくられた水路を流れて、今も小古曽の田を潤している。地区の住民はこの事蹟を称えて石碑を建て、毎年記念祭を行っている。

説明

江戸時代、内部川の水を利用していた小古曽の田は干害に悩まされていた。当時の名主三谷新太郎は、北小松の地から流れる小池川の水が小古曽村一ノ縄の地で内部川に合流していることから、この水を小古曽の地に引くことを企画した。

同じ場所に、コンクリートの堰となって残る横井井堰

水田の命である水利を巡る利権は複雑で強固なものであったろうが、采女村に働きかけ、嘆願・説得し、同意を得て、時の代官に申し出て許しを得た。この間多くの困難があったが屈することなく、手を尽くして事業を推し進めたが、労苦がたたって職を退いた。跡を継いだ河村源十郎は村人と共に内部川に堰を作り、水路を掘り、道を修して、天保3年（1832）ついに完竣し水を導くに至った。横井の地に設けたこの井堰を横井井堰と呼び、水路は横井川と呼ばれ、以後小古曽の沖田に水を送り続けている。（この間の事情は次ページ「碑文」参照。）



大正8年（1919）に、小古曽村の山本九三郎及び区長が発起人となり、米田の地に土地の寄付を受け、大治田・六呂見・川尻各村の賛同を得て、先人たちが行ったこの偉業を後世に伝え、顕彰する碑を横井川沿いに建立し、その遺徳を偲んできた。当初は役員が交代で毎月 20 日に燈明を上げていたが、その後は町役員総代による年１回の祭礼となった。現在ではゴールデンウィーク明けの日曜日、小許曽神社において三谷氏子孫と自治会役員・組長、農業委員が参列して記念祭が行なわれている。

地区では農家組合が中心となり、年4回井堰取水口から大治田までを5班に分けて、川浚いして保全に努めるほか、鯉の放流も行っている。また自治会は国土交通省が定めた水利使用規制に基づいて取水量を測定し、毎年１月に国土交通省に報告している。

横井の水は地域の人達によって守られ、小古曽の田は今なおその恩恵を受けている。

（横井井堰については『小古曽町郷土史』、四日市市合併７０周年記念誌』と『うつべ歴史覚書』に詳しい。）

あすなろう鉄道線路近くの横井川沿いに建てられている顕彰碑（表面）は工事を成し遂げた二人の先人と村人を称えている。碑文は、全 354 字、旧字体且つ篆書体の漢文で、縦書きで書かれているが、意訳して口語体の横書きに改めた。（誤りがあるとすればすべて編者の責任です）

跡鑿(セキサク)横井川碑　三重県知事正五位勲四等長野幹篆額(テンガク)（石碑などの上部に篆字で彫った題字）

以前は約 50m南にあったが
平成 22 年に現在地に移設。

三重県三重郡小古曽村は内部川の北に位置し、田は百町ばかりある。大地は平坦で一望遮るものなく見渡せる。地は肥沃であるが、干害のあるたびに水を求めて四方に手を尽くしていた。延享（碑文のとおり。延享は1744年から1747年まで）のころ名主を勤めていた三谷新太郎はこのことに心を痛め、考えを巡らせ、ついに内部川と小池川に堰をつくり、横井川を穿(ウガ)って水を導き、灌漑に供することを企画するに至った。

しかし事は采女村に関係することから、采女村の村役人のみならず村民みんなを説得し、ようやくその許諾を得て、代官に申し出て工事の許しを得た。村人を組織し、ついに工事にかかるものの、百出する難題に屈することなく、策を練り知恵を絞り、推し進めたが、労苦たたってその職を辞することとなった。代わって河村源十郎が名主となり、溝を掘り進め、道路を修理した。さらに大治田と六呂見の二村と横井川の利用に関して協議し、灌漑のみならず飲料にも供することとした。天保末年（天保は1830～1844まで）に工事は完成し、これより干害の被害をこうむることは無くなった。稲が豊かに実り、豊作を喜び、腹を満たすことができるのはすべてこの二人の力によるものである。

村人はその恩恵をうけながら、小古曽の米田の地に石碑を建て二氏の功績を遺そうとの計画を抱いていた。ついに二氏の事跡を刻し、祀(マツ)る時が来て、余に碑文の依頼があった。余はかつて小古曽村の戸長の職にあり、その事跡は詳しく承知していたことから、この事業に賛同し承諾した。

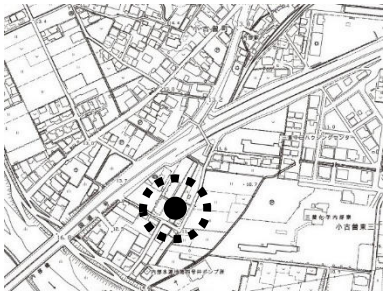
以上のことを心に銘じて、吟じて曰く。

川を堰して水を引き　溝を開き田に灌(ソソ)ぐ
餘りは潺湲(センカン)(水の流れるさま) に游(アソ)ぶに用ふ（流れにまかすの意）
規畫(キカク)(企て、はかること) に 愆(アヤマリ) 無く　偉績(イセキ)(偉大な功績) は顯赫(ケンカク)(あきらか) にして
利澤(リタク)(めぐみ) 豐全(ホウゼン)なり
民心は弗諼(ワスレズ)(弗は不と同義) して　貞珉(テイミン)(美名・正しい心) は永く傳ふ
二君の靈爽(レイソウ)(死者のたましい)　儼然(ゲンゼン)と在為(マシマ)せり
横井之水は　芳(カンバ)しくして萬年に流す

大正八年四月廿日

前三重郡日永村長勲七等吉村正敏撰（撰とは詩文をつくること）
洞津(どうしん)（津のこと）　市川進書丹（書丹とは石に下書きすること）

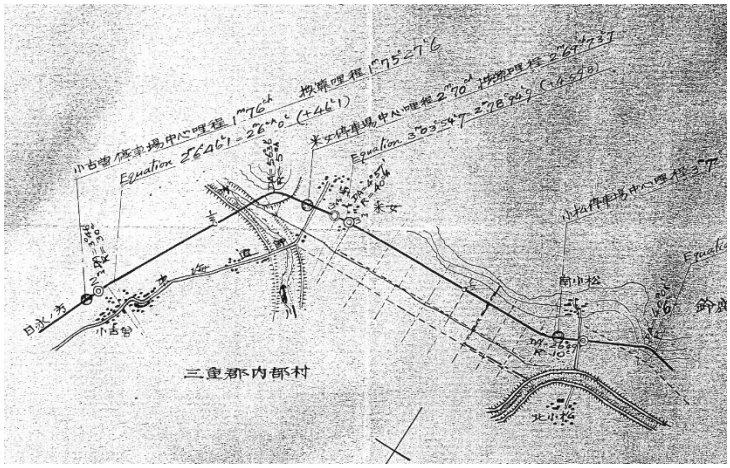
２．鈴鹿を目指した幻の未成線・・・内部線延線跡

概要	内部線は当初の計画では内部川を渡り、鈴鹿を目指していた。その一部、内部駅から内部川堤防まで敷かれていた線路跡が今も残っている。	場所	

説明

内部線は大正元年（1912）に八王子ー日永間で開業した三重軌道の鈴鹿支線として計画され、大正 11 年（1922）に日永ー内部間が開業した。

この鈴鹿支線は当初計画によれば、内部から南西方面に更に路線を延長し、鈴鹿山脈の裾野、巡見街道に面する伊船（深伊沢村･現鈴鹿市）に到達するものであった。途中には、采女･小松･下大久保･和無田の駅が配置され、終点の伊船駅には貨物の積み下ろしホームや機関車･客車の車庫が並ぶターミナルとなっていた。



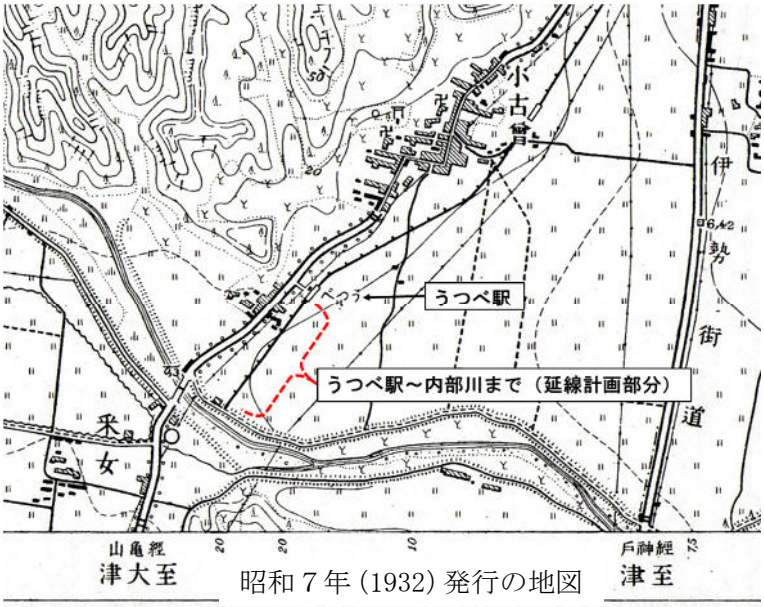
内部川以南の路線計画図、何案か計画されたものの一部。
（原図はいわゆる青写真。上図は白黒反転したもの。）

このため路線は内部駅から先の内部川堤防脇まで敷設されていた。昭和7年（1932）発行の地図にはこの路線がはっきりと記されている。

しかし内部川以遠の工事は、用地買収が思うように進まないことや旅客収入の伸び悩みから計画は進展せず、何度か工事竣工期限の延長を行なったが、ついに大正14年（1925）に鉄道敷設免許は失効した。

その後この堤防路線は内部川の砂利採り線として使用されていたが、昭和40年（1965）前後には撤去された。

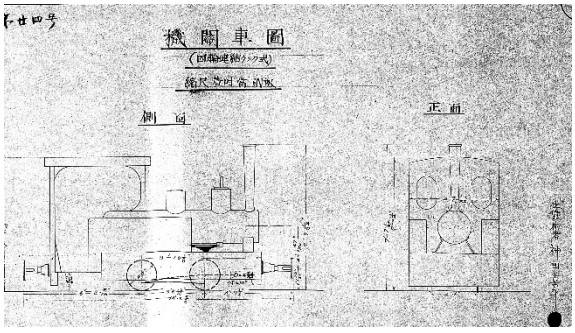
路線跡には今もなお線路敷や水路を渡る護岸壁が残り、往時をしのばせている。



昭和 7 年（1932）発行の地図

内部の近代歴史遺産　2・・・・・明治・大正・昭和の時代を経て遺された歴史の足跡

開業時の蒸気機関車。ドイツコッペル社製、13 トン、15 馬力。客車は定員 50 人のボギー式。速さは自転車に負けたともいわれている。
右図面によれば、
線路幅 2’ - 6”＝762mm
車体高 7’ - 7＋1/32”＝2,312mm
車体幅 4’ - 7＋29/32”＝1,344mm
(’フィート - ”インチ)



内部線の歴史

明治 43 年(1910)　軽便鉄道法制定･･･四日市鉄道･三重軌道･北勢軽便鉄道が名乗り
大正元年(1912)　三重軌道　日永ー四郷(後に八王子まで延伸)開業。
コッペル社製蒸気機関車使用
大正 2 年(1913)～大正 4 年(1915)　日永～南浜田～諏訪～四日市が順次開業
大正 5 年(1916)　三重鉄道に改称
大正 11 年(1922)　日永～南日永～泊～追分～小古曽～内部が開通(内部線の歴史がスタート)
大正 14 年(1925)　鈴鹿延伸計画失効
昭和 2 年(1927)　ガソリン気動車導入
昭和 18 年(1943)　内部線電化(八王子線は昭和 23 年)
昭和 19 年(1944)　三重交通に改称･小古曽駅廃止(戦後に復活)
昭和 39 年(1964)　三重交通の鉄道部門が三重電気鉄道に改称
昭和 40 年(1965)　近畿日本鉄道に移管
平成 27 年(2015)　四日市あすなろう鉄道スタート

線路跡
位置図･写真

①

国道 1 号の歩道橋から見ると、南へ向かって線路跡が伸びている。

②

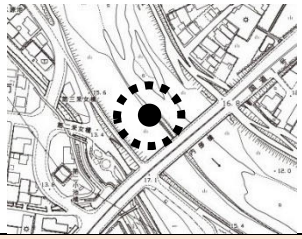
線路敷は写真右手から左へ伸びている。水路を渡る護岸壁。

③

同じく水路を渡る護岸壁。
写真の左手の先は宅地となっていて、線路跡はここまで。

内部線の未成線については以下の本に詳しく記されている。
新視点三重県の歴史（2013 年 2 月、三重県史編さんグループ、山川出版社）
近鉄の廃線を歩く　懐想の廃止路線 40 踏査探訪（2006 年、徳田耕一、JTB パブリッシング　）

３．河川敷に取り残された・・・東海道旧内部橋橋台跡

概要	古くより東西交通の大動脈であった東海道が内部川を渡る旧内部橋橋台の石組みが、現在の橋の上流、右岸側に残っている。	場所	

説明

古代から東西交通の大動脈であった東海道が渡る内部川には、江戸時代長さ 40 間（73m）の土橋が架かっていた。橋は幅 2 間（3.6m）、3 本立ての橋杭 21 組の構造で、その様子は広重の浮世絵にも描かれている。

東海道は明治に入って国道 2 号線と名づけられたが、昭和 25 年（1950）までは曲がりくねった小古曽の町並みを通り、内部川を渡る橋も木造であった。なお、昭和 27 年（1952）以前の国道 1 号線は東京～伊勢間であり、追分から大阪間が国道 2 号線と呼ばれていた。現在の路線番号で呼ばれるようになったのは昭和 27 年（1952）以降である。

広重画佐野喜版狂歌入東海道五十三次
内部橋から杖衝坂へ向かう旅人の画

その旧内部橋は現在の橋の上流 50mあたり、元の仏壇屋「佛愛」さんの前から内部出張所に向かって架っていた。

当時の東海道は、杖衝坂だけはあまりの急勾配から、昭和 2 年（1927）に坂の西側に道がつくられ昭和坂といわれた。しかし小古曽と采女の町並みを迂回するバイパスとして、追分から昭和坂の間に新たな道を通し、内部川にコンクリートの橋が架けられたのは昭和 25 年（1950）から 26 年（1951）にかけてである。

昭和 17 年（1942）完成の東海道内部橋（木橋）
南詰より小古曽方面を望む。

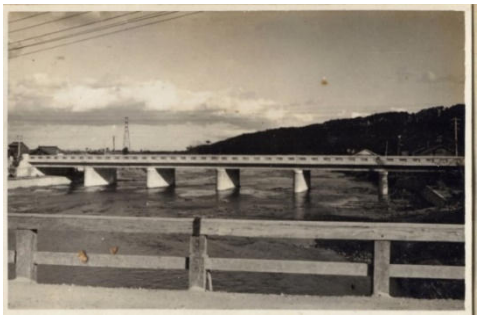
木橋時代の東海道旧内部橋の橋台

その後しばらくは旧内部橋も使われたが、昭和 30 年代に台風で流され、復旧されないままになってしまった。その後川幅は拡幅されたが、かつての橋台の石組は平成 28 年（2016）の今も川のなか、河川敷に残っている。

その後の内部橋

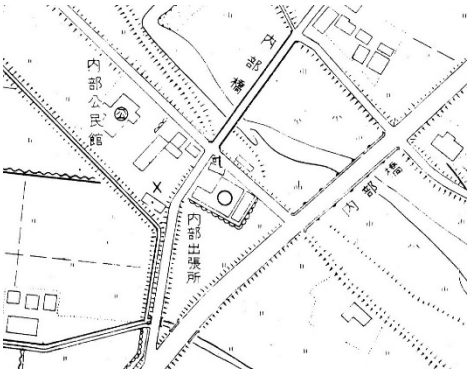
昭和 25 年(1950)コンクリート製新内部橋工事中の写真。
遠くに見える橋が木造の旧内部橋。
右岸側に建っている大きな建物は当時の四日市市役所内部出張所(旧内部村役場)

昭和 26 年 5 月、木造橋の後継として新しく完成したコンクリート製内部橋



木造の旧内部橋から見た、完成したばかりの新内部橋。

出張所傍の櫓から見た新内部橋。
橋長 66m、幅員は 7.5mしかなく、21 年後には架け替えられた。



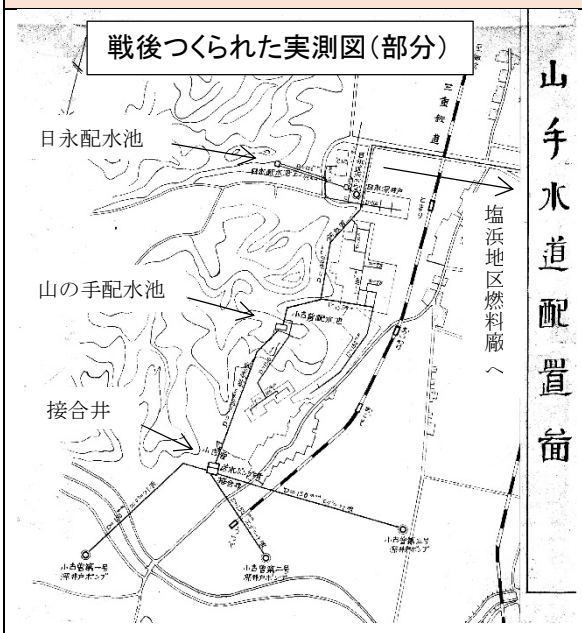
昭和 32 年(1957)の四日市市都市計画図には木造とコンクリート製の新旧の橋が描かれている。

現在の内部橋
昭和 47 年から 49 年にかけて片側車線ごとに新しく架け替えられた。
その後、平成 22 年に耐震化工事と、渋滞解消及び安全対策として右折れ車線設置、歩道の拡幅工事が行われた。

4．戦後市上水道に引き継がれた海軍燃料廠山の手配水池

概要	第二海軍燃料廠の水道施設である山の手配水池は戦後四日市市に引き継がれ、内部をはじめとする市南部の上水道の水源となった。当時の深井戸と、接合井と呼ばれた集合タンクに送水する配管敷の跡が直線道路として今も残っている。

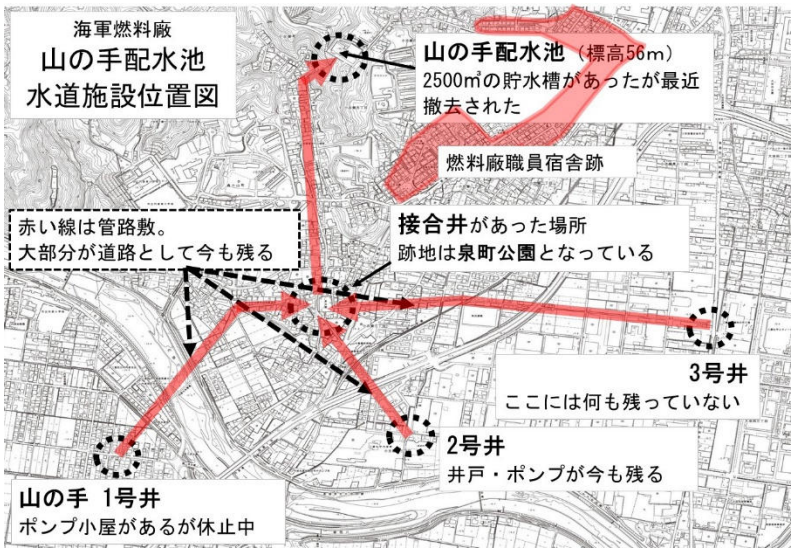
説明



昭和 16 年（1941）、当時の海軍省は塩浜地区に第二海軍燃料廠を建設、航空燃料の製造を開始した。工場は多くの用水を必要としたため、市内の日永、小古曽、河原田、大里及び三重郡楠町（現四日市市楠町）の各地に水道施設を作って給水した。

小古曽町地内の愛宕山標高 56mの中腹に設置された山の手配水池は、容量 2500 ㎥、給水能力 1 日 4,000 ㎥を持ち、昭和 15 年（1940）に完成した。

水源である深井戸は小古曽に 2 本と采女に 1 本掘られ、汲み上げた水は現在の泉町公園にあった集合タンク（接合井）に送り、さらにそこからポンプで山の上の配水池に送った。配水池からは自然流下で工場へ送水した。



当時の内部村にとっては水道施設の建設は突然の話であったが、海軍省の方針にはそのまま従わざるを得なかったようすが「小古曽町郷土史」に記されている。

終戦後、上水道の拡充を進めていた四日市市は昭和 24 年（1949）に国から山の手配水池の無償貸与を受け、これにより小古曽町を皮切りに内部地区への給水がはじまった。住民の意向を考慮しない戦時下の事業であったが、戦後の地元住民の生活向上に大きく寄与した。

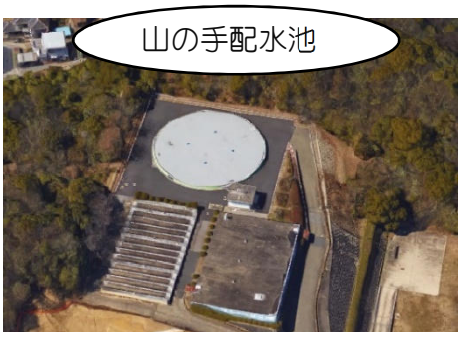
その後、伏流水の豊富な内部川流域は水源開発調査の結果、新たな井戸が掘られ、配水池にも貯水槽が増設されて、山の手配水池は市南部地域の上水道拠点として重要な地位を占めるに至っている。

70 年を経て、最近まで残っていた山の手配水池の旧貯水槽も平成 28 年（2016）に撤去された。残る関連施設は**深井戸**と、深井戸から接合井のあった泉町公園まで田や畑や町を切り裂いて敷設された管路敷跡の**直線道路**だけである。

> メモ　**土地の人の思い出**
> 接合井の敷地には立派な門があり番小屋が建っていた。タンクは半分地下に埋められ、地上には 1m くらい出ていた。その上に赤瓦の屋根が葺かれていて、上がって遊んだことがある。

今なお残る海軍燃料廠時代の水道施設

山の手配水池



工事前の山の手配水池。手前左の横しまの屋根が燃料廠時代の旧配水池。平成 28 年に撤去され、新貯水槽が建設されている。

接合井跡（泉町公園）

ここには 8.7×12.7×4mのコンクリート製タンク（半埋設）があった。ここから 75 馬力ポンプ 2 基、口径 400mm鋳鉄管で山の手配水池へ送った。

1号井と管路敷

采女町中部の青木神社東にある1号井小屋（中央の黒い門）。井戸の深さは150m。口径 150mmの石綿セメント管で接合井に送水した。現在は休止中。

メモ　1 号井ポンプ小屋
土地の人の思い出

昭和 24・5 年の話。当時内部小 4 年生のころ、ウーンと音がしていたので入ってみるとポンプが回っていて、その下にグリスが山になっていた。取って帰り、メンコに塗ると丁度良い重さと湿りになり、仲間うちの勝負で大いに勝った。見つかれば叱られたことだろう。

1号井からまっすぐ北へ。内部川を渡ったところから小藪に向う道路。

2号井と管路敷

小古曽東 3 丁目の 2 号井。現在は小古曽町自治会の管理。渇水時には運転することがある。

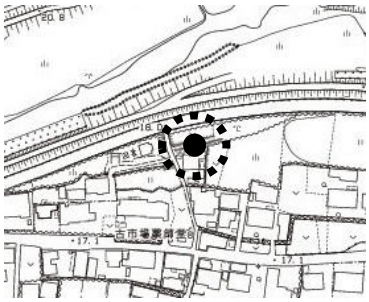
2 号井から北西へ。元の中日ハウジングセンターを横切り、内部線をくぐって山中胃腸科病院横をまっすぐ泉町公園へ向かう。

3 号井と管路敷

小古曽東 2 丁目の 3 号井跡。井戸の痕跡はない。左手福島鉄工の北にあるアコムの無人店舗となっている。さらに北はマルハン駐車場。

管路敷跡は福島鉄工とマルハンの間の 3m幅の空き地となっている。その先は道路となって泉町公園を目指している。

5．治水の記憶を今に伝える・・・内部川旧堤防跡

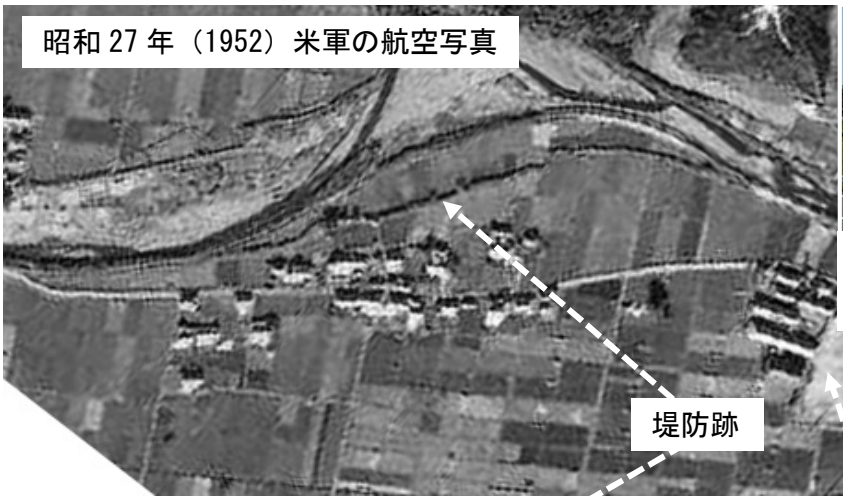
概要	内部川は過去に何度も洪水に見舞われ、堤防が決壊した歴史がある。県道 407 号線沿い、古市場の天王さんの社の東には大正年代（推定）の内部川旧堤防の跡が一部残っている。	場所	

説明

内部川は古くから堤防の決壊や橋の流失を繰り返し、治水は大きな課題であった。四日市市史には大正年間に起こった 5 回の決壊や洪水の様子が記録されている。

大正 9 年（1920）内部川決壊の際古市場では家屋が流されたと伝えられているが、その当時の堤防跡が古市場に一部残っている。県道 407 号線沿い、天王さんの社の東の畑にある土手とその前後に連なる竹林がそれで、現在は国有地となっている。

昭和 27 年（1952）米軍の航空写真にはこの堤防跡の林が黒い筋となって写っている。



普段竹林となっている県道沿いの堤防跡は数年ごとに竹を伐ると姿を見せる

内部川洪水の記録

永正七年（1510）

貝家町上品寺の史料に「永正七年七月十四日古市場真観寺遷杖衝坂」とある。
古市場は内部川が蛇行する下にあり、何回となく氾濫が繰り返されてきた土地であることから、永正七年（1510）にこの地にあった真観寺を水の被害のない坂の上に移したものといわれている。

（四日市市立図書館集録　泗水 No9 岡本孝行『故郷の伝統を訪ねて（9）弘法の井戸・大日の井戸』より抜粋）

寛政 3 年（1791）8 月（大風雨）

松平甲斐守様領分勢州三重郡小古曽村（松平甲斐守様領分とは大和郡山藩）
往還通並木根返り風折　三本　　潰家大破家共　六軒
松平甲斐守様領分勢州三重郡采女村
往還通並木根返り風折　十三本　潰家大破家共　十軒
（四日市を語る第二十二集 179 ページ、内容は四日市市史昭和 5 年版より抜粋したもの）

大正 2 年（1913）10 月（台風）

三重郡塩浜村で内部川堤防が決壊し、磯津において家屋流出 4 戸・浸水 40 戸の被害が出た。（市史 13 巻 550 ページ、資料番号 404）

大正 7 年（1918）8 月（集中豪雨）

左岸堤防決壊、小古曽村人総動員の対応で流出区域は僅少に止まり、被害の程度も不幸中の幸いであった。（小古曽町郷土史 60 ページ）

大正 8 年（1919）6 月（集中豪雨）

前年の決壊場所が崩壊、濁流が沖田一面に広がり被害は甚大であった。
（小古曽町郷土史 61 ページ）

大正 9 年（1920）

洪水に襲われた内部川写真（右の写真のみ、記事はない）→
（四日市市史 18 巻 522～523 ページ）

写真137　大洪水時の内部橋付近（1920年）

大正 12 年（1923）9 月（台風）

内部川堤防が決壊し省線四日市・河原田両駅間の鉄道線路が破壊して汽車不通、川尻方面は床上浸水 80 戸、村民は避難。また、堤防欠潰（120 間）、山崩れのため、内部村では家屋一戸倒潰、浸水家屋 20 戸位、同村小学校は浸水危険のため消防隊青年会員が出動、防水に務めた。
（伊勢新聞）（市史 13 巻 553 ページ、資料番号 406）

昭和 36 年（1961）6 月（集中豪雨）

市内では 38 の橋が流失、河川の損壊 172 カ所、壊れた道路 190 カ所。
内部川では前川橋、矢矧橋、新田橋が流失。
六名町地内で 300m にわたって堤防が決壊、前川橋付近の堤防がえぐられ危険な状態となった。（市史 15 巻 325 ページ、資料番号 171）

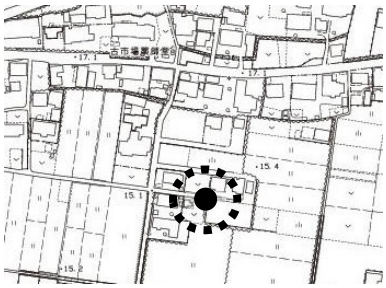
昭和 46 年（1971）9 月台風 29 号

日永地区では天白川が決壊。内部地区でも 100 人以上が体育館に避難
（市史 15 巻 328 ページ、資料番号 174）

昭和 49 年（1974）7 月（集中豪雨）　四日市市では死者行方不明者 2 名 、1 日雨量 304mm、1 時間雨量 71.5mm の記録的豪雨。内部地区では、北小松前川橋、小松橋が流失。新田橋上流地点で 3 か所右岸が決壊し小古曽町新田の田畑が水没した。采女地内でも水流が押し寄せ名倉の家を浸水し、国道を乗り越えて一の縄の堤防を決壊し、双方より押し寄せた激流は水嵩を増し新田では家々をも浸水し、一時は床上 2m にも達した。（小古曽町郷土史 77 ページ）

内部川　北小松橋流出状況
（写真は四日市市史より）

6．地元の寄進で建てられた・・・旧内部学校跡

概要	内部小学校は創立以来、場所は 2 度、名前は 9 度変わる変遷を経て現在の地にある。明治 7 年（1874）の創立から 38 年間は、今の地から西に約 200m、当時の采女村字大日の地にあった。跡地は畑に変わっているが今も石垣が残り、往時をしのばせている。	場所	

説明

内部小学校の創立は明治 7 年（1874）2 月 3 日三重郡采女村字大日に設立された人民共立学校に始まる。その地にあった寺子屋を学校としたものであったらしいとの記録がある。

明治 5 年（1872）の学制発布をうけて順次設立されていった四日市市域の学校の中でも 2 番目に早い創立であった（1 番目は明治 6 年 9 月小山田小学校の前身、堂が山小学校）。 明治 9 年（1876）の教員・生徒数は教員 4、生徒男子 82、女子 52 の記録が残るが、当時の場所は定かでない。

明治 18 年（1885）、同地内に北小松村ほか 3 カ村（おそらく采女・貝家・波木）から土地 8 畝 12 歩（832 ㎡）の寄進と金百貳圓（102 円）の寄付を受けて校舎 1 棟が建設され、**「内部学校」**と称した（内部小学校沿革史によれば明治 16 年）。地元のこの行為に対して、当時の三重県令（知事）から賞状と恩賜の品（木杯）が下されている。

内部学校跡の石垣

その後、明治 20 年（1887）には内部簡易科授業所、明治 22 年（1889）には内部尋常小学校、明治 42 年（1909）には高等科を併設し内部尋常高等小学校と称した。この当時の学校跡の石垣が古市場の旧道に建つ常夜灯角から南に入った畑地に残っている。

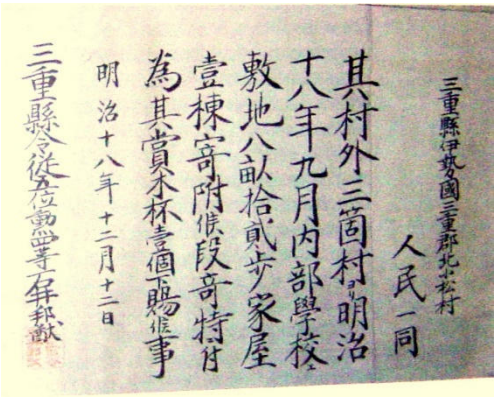
内部学校のその後の変遷をみると、明治 43 年（1910）に現在の地采女町花の木に校舎を新築して移った。その後大正 15 年（1926）に青年訓練実施実業補習学校、昭和 10 年（1935）に三重県公立青年学校、昭和 16 年（1941）に内部村国民学校と改称されている。昭和 18 年（1943）に四日市市と内部村の合併により市立となり、戦後昭和 22 年（1947）に内部小学校と改称され現在に至っている。

明治 18 年（1885）から 23 年間、大日にあった旧内部学校の所在地については内部地区市民センターの地籍図にも記録があり、土地と校舎の建築費の寄進証書も残っている。

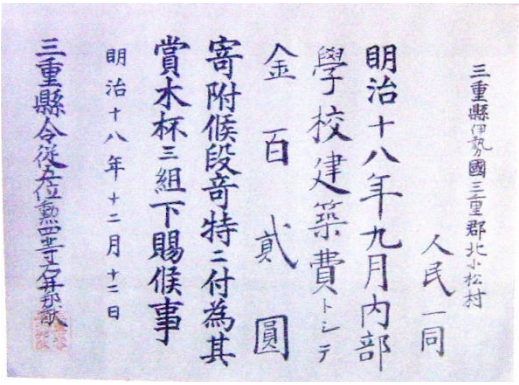
内部小学校の沿革

明治 7 年 2 月 3 日	**人民共立小学校　三重朝明郡采女村字大日**
明治 9 年 11 月	教員 4 人、生徒男 82 人、女 52 人（明治 9 年 11 月 1 日調）
明治 16 年 4 月	**校舎新築　内部学校と改称（別資料では昭和 18 年）**
明治 20 年 4 月	**内部簡易授業**と改称
明治 22 年	**内部尋常小学校**と改称･生徒数　170 名
明治 25 年	大字小古曽を加えて一村一校とし校舎を増築
明治 42 年 4 月	高等科を併置、**内部尋常高等小学校**と改称、学級数 8、職員数 9、生徒数 415
明治 43 年 3 月	**現在の位置　采女村字花の木に校舎を新築**
大正 15 年 6 月	青年訓練所発布と共に**青年訓練実施実業補習学校**と改称
昭和 10 年 7 月	**三重県公立青年学校**と改称
昭和 16 年 4 月	**三重県三重郡内部村国民学校**と改称
昭和 18 年 9 月	市制実施（四日市市に合併）につき**四日市市立内部国民学校**と校名変更
昭和 22 年 5 月	学制改革（6・3 制実施） **校名は四日市市立内部小学校と改称**・児童数　630 人
昭和 32 年 4 月	南小松町が四日市市に合併。児童 86 名が転入学。
昭和 42 年	校舎鉄筋 3 階新築
昭和 49 年 2 月 2 日	**創立 100 周年記念式典**
昭和 59 年	四日市市立内部東小学校が分離

字大日時期


三重縣伊勢國三重郡北小松村
人民一同
其村外三箇村ノ明治
十八年九月内部學校
敷地八畝拾貳歩家屋
壹棟寄附候段奇特ニ付
為其賞木杯壹個賜候事
明治十八年十二月十二日
三重縣令從五位勲四等石井邦猷

三重県伊勢国三重郡北小松村
人民一同
その村ほか三か村より明治
十八年九月内部学校へ
敷地八畝十二歩家屋
一棟寄付候段奇特に附き
その賞として木杯一個下賜候
こと
明治十八年十二月十二日
三重県令従五位勲四等
石井邦猷（いしいくにみち）


三重縣伊勢國三重郡北小松村
人民一同
明治十八年九月内部
學校建築費トシテ
金百貳圓
寄附候段奇特ニ付為其
賞木杯三組下賜候事
明治十八年十二月十二日
三重縣令從五位勲四等石井邦猷

三重県伊勢国三重郡北小松村
人民一同
明治十八年九月内部
学校建築費として
金百貳円
寄付候段奇特に附きその
賞として木杯一個下賜候こと
明治十八年十二月十二日
三重県令従五位勲四等
石井邦猷（いしいくにみち）

<学校>内部小　古市場にあった人民共立学校の卒業写真　―明治 37 年（1904）―

明治 37 年（1904）
当時の内部尋常小学校の卒業写真

7. 行商人の道しるべ・・・服部泰次郎道標

概要	大正時代、行商から身を起こし米穀商として成功した実業家が、行商の時道に迷って苦労した経験から、村々の辻に建てた石の道標（道しるべ）

説明

自動車が発達し道路が張り巡らされ、道路標識が整備されている現在とは違い、戦前までは幹線道路を外れた村落の道は行商人や旅人にとって分かりにくかった。

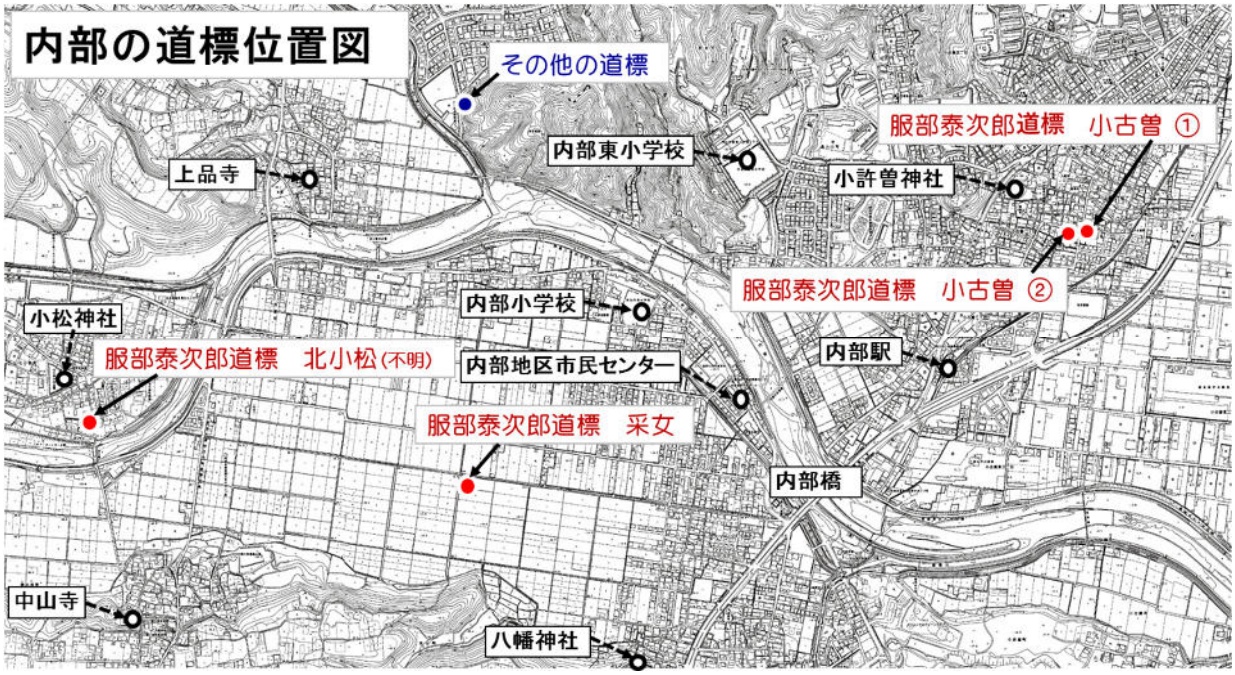
三重郡小杉村（明治 22 年に 5 カ村が合併して三重村となった）出身で、行商から身を起こし県下屈指の米穀商となった服部泰次郎（安政元年＜1854＞生まれ）は、大正八年（1919）に、行商をしていた頃道が分からなくて苦労した経験から役所に願い出て、北勢地方の里道に道標の設置を進めた。歩く以外に交通手段のなかった当時、重い荷物を担いで回る行商にとって道に迷うことはたいへんな労苦であったろう。三重郡内の 29 カ村の全部の辻に道標を建てることを目標とし、その数は 1191 基に上ったという。

采女の田んぼを通る道に建つ道標

秦次郎の道標は、集落の辻に立てられ、その多くは隣の集落への道筋を示し、地名が刻まれている。集落に住む人々が日常往来している間道を、遠来の人に教えることを目的とし、旅人の案内として大変喜ばれた。

道標は千種村の石工たちが朝明石に刻み作り上げた。運搬といえば荷車しかなかった時代、一柱 60～70Kgの道標を現地に運び、建ててゆく作業はたいへんであったろう。秦次郎は道標の建立が大体出来上がった大正 9 年（1920）2 月 29 日に 67 歳で永眠した。

内部地区には彼の建てた道標が小古曽に 2 か所、采女に 1 カ所残っている（北小松に 1 カ所あったが近年不明）。いずれも1辺 20cm、高さ約 50cm の荒削りの花崗岩で、半ば土に埋もれている。行き先の名前は風化しているが何とか判読できる。



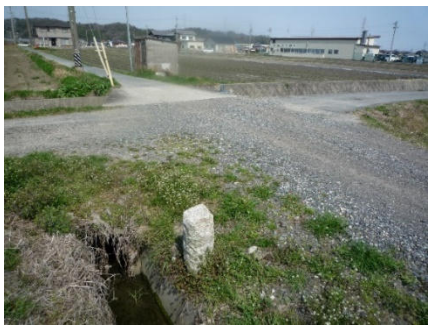
服部泰次郎氏の生立ち

- 安政元年（1854）三重郡小杉村（**現四日市市小杉町**）で誕生。少年時代は近隣のお寺の**寺子屋**で学ぶ。
- 14.•5 歳頃　家業の半農半商や製茶業を手伝い、農繁期には小間物や雑貨を担いで近郊近在を**行商。**
- 29 歳頃　**米穀商**を営み、菰野の関取米などを四日市港から横浜港へ送り、伊勢米の販路拡大に尽力。
- 日清、日露戦争の時は軍用米を扱い、また米国などへの輸出も図るなど**県下屈指の米穀商**となった。
- 大正 8 年（1919）病臥に伏し、かねてよりの念願であった**道標建立**を三重郡役所に申し出。1 年を経ずして郡内 29 カ村、千余体を建立。
- 大正 9 年（1920）**道標完成**を見て、67 歳で逝去

内部の道標詳細

服部泰次郎道標　小古曽①
東海道が小古曽町内で二度直角に曲がる辻の角にある。
表示　西面「左　追分道」
　　南面「右　大治田道」

服部泰次郎道標　小古曽②
①　の西約 20m、道の中ほどにある。
表示　東面「左　河原田道」
　　北面「右　采女道」



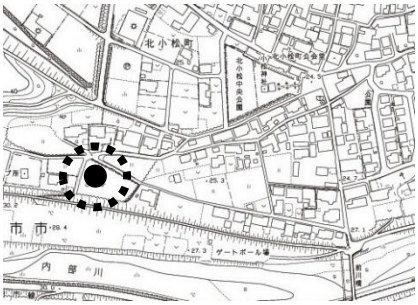
服部泰次郎道標　采女
采女町の西に広がる畑地の真ん中、古市場から南小松へ通じる農道の西側にある。
表示　北面「西　南小松」
　　東面「南　神戸」

服部泰次郎道標　北小松（不明）
前川橋から北小松神社へ向かう道の中間にあったが、近年家屋改修の際行方不明となった。
表示　表「東　貝家」、
　　裏「西　山田」、
　　左「南　南小松」

その他の道標　貝家町（波木南台調整池東）
表には右四郷村四日市道、右側には昭和五年二月采女區長清水留松•永田甚樵　発起人古市惣太の名前、他の二面にも「夜となく晝となく云々••」ほか興味をひかれる文面があるが判読できず。
かつて貝家から丘陵地を抜けて四郷村へ向かう里道があった。この道標はそれを案内するものであろう。

服部泰次郎の事蹟については以下でも取り上げられている。
『こものがたり第三集　続・歴史こばなし』　佐々木一　昭和 61 年（1986）
『四日市の礎Ⅱ　60 人のドラマとその横顔』　清水雅明　平成 26 年（2014）

8．地元住民が独自に設置・運営した内部簡易水道跡

概要	昭和 30 年代、南小松･北小松･貝家･波木地区では、国庫補助を受けて住民の力で独自に簡易水道を設置、運営した。当時の水源施設が北小松町に残っている。	場所	

説明

南小松･北小松･貝家･波木地区に給水した内部簡易水道の歴史

背景

昭和 15 年の海軍燃料廠山の手水源地の完成により、小古曽地区･日永地区の軍関係官舎 700 戸には給水されていた。しかし内部地区の一般市民への上水道普及は戦後に入ってからである。四日市市は上水道の第 1 期拡張計画のなかで、国から山の手配水池の無償貸与を受けて整備を進め、**昭和 25 年(1950)**の小古曽二丁目を皮切りに、順次国道 1 号線沿いを中心に上水道が整備されていった。

この動きを受けて、国道から 1～2.5 ㎞西に位置し、農村地区の性格を強く保っていた北小松･南小松･貝家･波木地区では住民自らが運営する**簡易水道**を計画、資金を負担するほか、国の支援を受けて昭和 35 年(1960)に完成した。

この時期に敷設された他地区の簡易水道がいずれも小規模なものであったのに対して、内部の簡易水道はそれぞれ 500mの間隔を置いて位置する4つの集落への給水を目ざす、四日市市としては最初の**広域的な簡易水道**であった。

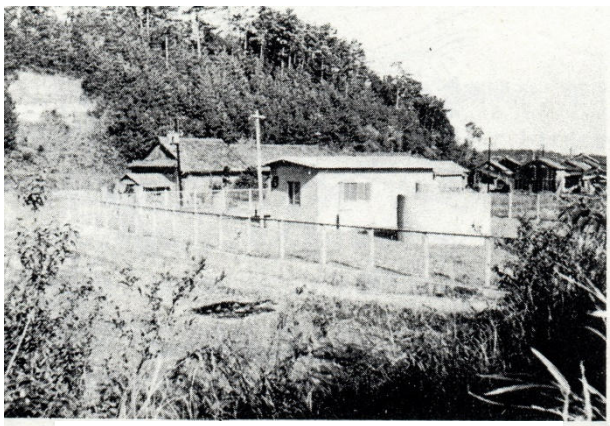
北小松地内に今も残る簡易水道の水源設備。
約 50m 西には内部水源系第 5 号ポンプ所がある。

給水の規模

- 給水区域:北小松･南小松･貝家･波木
- 給水計画戸数:420 戸
- 給水計画人口:2,360 人
- 給水量:1 人 1 日平均 100 リットル

水源･水量･水質

水源は前川橋北詰から 300mほど西に上ったところ。内部川左岸堤防近くの北小松地内に、深さ 8mの鉄筋コンクリート製の浅井戸を設け、汲み上げた。**この井戸が現在も残っている。**



内部簡易水道水源施設、当時の写真。

給水施設

浅井戸に併設した施設で原水を殺菌処理し、北側の台地(標高約 50m)に設置した容量 30 m^3 の高架水槽に圧送して、そこから需要者へ給水した。配水管は延長 6,567m であった。台地にあった高架水槽は、今はない。

工事費
- 総額:1,500 万円
- 国庫負担:350 万円
- 地方債:790 万円
- 地元負担:360 万円

敷設工事
昭和 35 年(1960)10 月 1 日着工、
翌年 3 月 30 日竣工
(簡易水道としての供用期間は 5 年)

水道経営と上水道への編入

内部簡易水道の運営期間は 5 年間という短期間であった。その実績は例えば昭和 40 年(1965)の給水戸数 416、給水人口 1,983、配水量 122,809 ㎥であった。

独自の料金体系で運営されていたが、施設の修理費などはその都度需要者の負担となっていたことや、上水道の方が料金が割安など、住民にとっては上水道の方が有利な点が多かった。こうしたことから上水道への編入の要望が強く、昭和 41 年(1966)の四日市市の第二期拡張事業により市上水道の給水区域に編入された。

図Ⅱ－43　内部簡易水道位置図

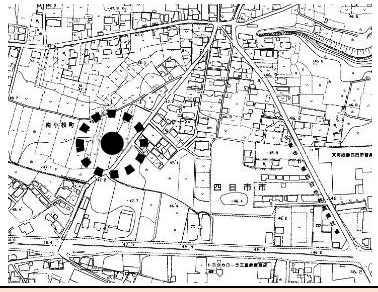
メモ　采女にも住民設置の水道があった

土地の人の話によると、采女地区においても、昭和 26・7 年ごろ独自に住民が設置した水道施設があった。

采女八幡神社前から西南に入ったハサミ谷に井戸を掘り、そこから春雨川沿いに配管を敷いて、東町・中町・西町の約 50 戸と共同風呂「丸山湯」にも給水していた。

中町の春雨川沿いに残る空き地が「丸山湯」の跡地である。

9. 文化財級の産業遺産・・・装荷線輪用櫓

概要	1928 年(昭和 3 年)、東京－神戸間に日本で最初の長距離電話通信回線として設置された架線用の櫓。南小松の畑の中にある。三重県では現時点で**3 か所**を確認している。愛知県では国の登録有形文化財に指定されている。	場所	

説明

南小松の畑の中に立つ装荷線輪櫓 ①

電信の時代から電話へと通信技術が進歩していった初期のころ、音声が減衰するため長距離通信は限界があった。これを解決し、長距離通話を可能にする技術がアメリカで開発された装荷ケーブルと真空管中継器方式であった。

この方式は通話回線に多数の芯線を絶縁して束ねたケーブルを用い、一定の距離ごとに信号を増幅させ、ゆがんだ波形を整形する施設として真空管中継器を備えた中継所を設置し、更に中継所間には音声の減衰を防ぐために一定の間隔で**装荷線輪**(ローディングコイル)という装置を挿入するというもの。

この装荷ケーブル方式による日本で最初の通信回線は 1928 年(昭和 3 年)、東京－神戸間 609.4km に開通した。中継所は約 80km 間隔で、東京を基準として横浜、足柄、江尻(清水)、見附(磐田)、豊川、名古屋、亀山、膳所(大津)大阪の 9 カ所に設置された。このうち亀山電話中継所は日本で最初の電話中継所となったところで大正 13 年(1924)に完成し、設備一式をアメリカから輸入した当時最新のものであった。

中継所と中継所の間には 1830m(6000 フィート)間隔で装荷線輪が設置された。この装荷線輪を置く施設として架空線用に建設されたのが鉄筋コンクリート製の櫓で、長さ 4100mm、幅 3200mm の四隅に高さ約 6500mm の 4 本の柱(440mm 角)を配置し、柱の中間約 3700mm の高さに装荷線輪を置くプラットフォームを設けた構造となっている。

メモ　**名倉・追分にもあった**
年配の人によれば、子どもの頃采女町名倉の地（市民センター南）にもこの櫓が立っていた。いつの間にかなくなっていた。
また、ここから北へ約 1.9 kmの日永の追分にもあったという。

この櫓が内部では**南小松町の国道１号北の畑の中**に残っている。他にこの近くでは、南小松の櫓から直線距離で 6.9km 離れた鈴鹿市広瀬町(装荷線輪櫓②)と、そこから更に 1.6kmにある亀山市田村町(同③)にも確認されている。

装荷線輪櫓 ②
鈴鹿市広瀬町県道 637 号沿いの畑の中にある。
南小松から直線距離で 6.9 km

装荷線輪櫓 ③
亀山市田村町県道 641 号沿い。
広瀬町からは 1.6km

装荷線輪位置図

文化遺産オンライン Cultural Heritage Online　文化庁ホームページ「文化遺産オンライン」より

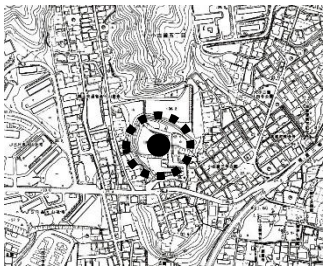
旧豊川電話装荷線輪用櫓　きゅうとよかわでんわそうかせんりんようやぐら

愛知県
昭和前／1926-1988
鉄筋コンクリート造、面積 10 ㎡、1 基
愛知県豊川市野口町開津 11
登録年月日:20071205
登録有形文化財(建造物)
旧豊川電話中継所の約4km西方に建つ。面積10㎡、高さ6m、鉄筋コンクリート造の櫓。当時の逓信省の標準設計になり、上部に装荷線輪を設置していた。わが国最初の長距離市外電話用ケーブル施設の希少な現存例である。

東京神戸間の長距離電話工事の詳細については国会図書館の蔵書検索で見ることができる。
「東京神戸間長距離電話「ケーブル」工事の概要」（昭和 3 年　逓信省工務局　30 ページ、図版 21 枚）

消滅歴史遺産・・・遺跡・痕跡は残っていないが歴史遺産にふさわしい！

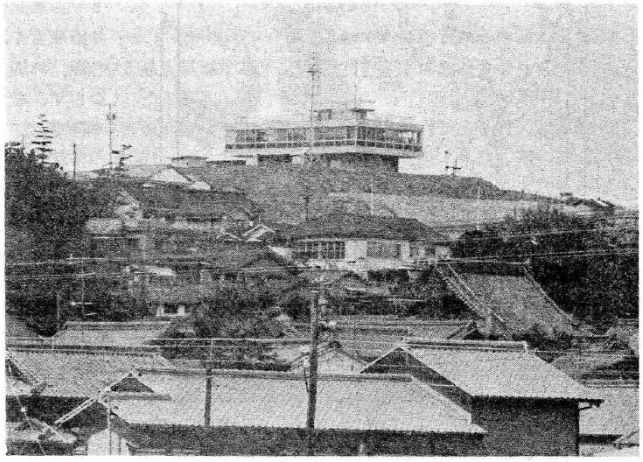
＜番外＞公害の空を観測し続けた・・・四日市測候所

概要	かつて小古曽五丁目愛宕山の山麓に測候所があり、威容を誇っていた。しかし急速な技術革新による観測の自動化が進み、ついに 1997 年（平成 9）に閉鎖され、跡地は住宅地に変わった。 四日市の歴史に貴重な足跡を刻んだが、残念ながらその痕跡は全く残っていない。	場所	

説明

四日市測候所の設置には四日市公害が大きく関連している。四日市市は昭和 30 年代に石油化学コンビナートが進出し新工業都市として急速に発展してきた。昭和 34 年（1959）第 1 コンビナートが稼働を開始した直後からコンビナート周辺地域、特に塩浜地区及び磯津地区で、ぜんそく等の呼吸器系疾患に苦しむ住民が顕著に増え始めた。四日市市は「四日市市公害防止対策委員会」を昭和 35 年（1960）8 月に発足させ、市内の汚染状況の調査に乗り出した。こうした中で大気汚染調査、気象観測のための測候所開設の機運が高まってきた。

当時三重県内の測候所は津気象台（明治 22 年＜1889＞～現在）、尾鷲測候所（大正 10 年＜1921＞～2007 年）、亀山測候所（昭和 6 年＜1931＞～1966 年）、上野測候所（昭和 12 年＜1937＞～1997 年）があったが、昭和 6 年（1931）に開設された亀山測候所の庁舎は老朽腐食が甚だしく、業務人員に比べ狭く業務に支障を生じていた。そこで四日市市が土地の整地、宿舎の建設の資金を負担し、亀山測候所を四日市に移転して四日市測候所が開設されることになった。

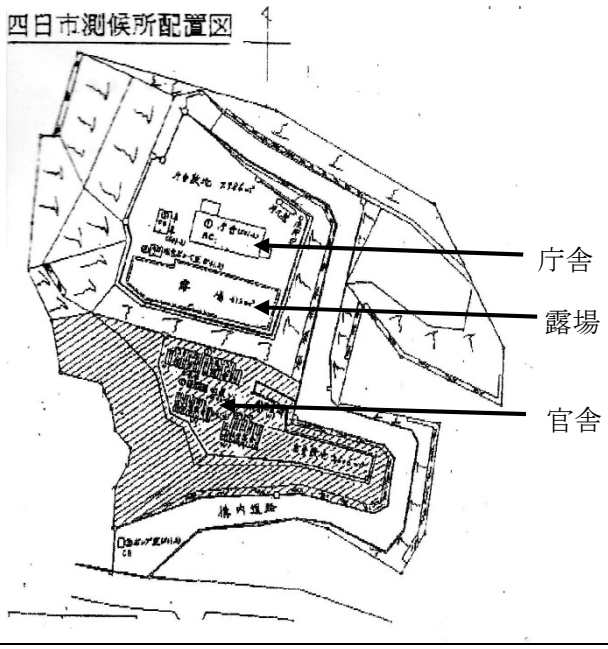


昭和 41 年（1966）四日市測候所は愛宕山の麓、標高 52m の小古曽五丁目に、敷地総面積 10,592 ㎡、庁舎面積 1 階 157 ㎡、2 階 304 ㎡の堂々たる威容で完成、これに宿舎 4 戸が併設されていた。

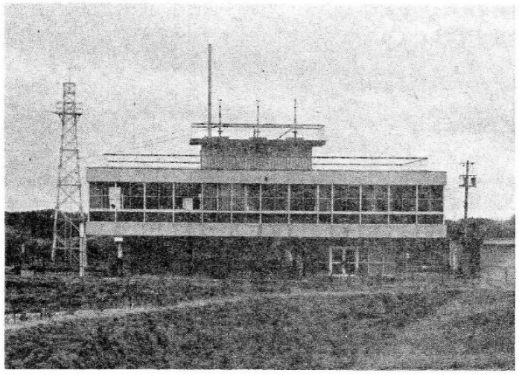
当初は定員 9 名でスタートした観測業務は時代の変遷とともに昭和 49 年（1974）に 7 名、昭和 50 年（1975）に 6 名、昭和 54 年（1979）に 4 名、平成 4 年（1992）には 3 名と急速に合理化されていった。

この間、気象庁は気象衛星、気象レーダー、アメダス観測網、ウィンドプロファイラー、計測震度計ネットワークなど、IT 技術を取り入れた業務の技術革新を進め、気温、降水量、風向・風速等の観測業務については、自動化された機器により観測・即時的データ送信が可能となったことから、平成 8 年度以降測候所の無人化（特別地域気象観測所への移行）を進めた。

かくして平成 9 年（1997）に四日市測候所は上野測候所と共に廃止が決まり、31 年間の活動の幕を閉じた。その後尾鷲も平成 19 年（2007）に閉鎖され、県内の測候所は現在では、津気象台を除いてすべて自動観測施設である「特別地域気象観測所」になっている。



所在地
高塚町の北、見当山（二等三角点がある）から愛宕山に連なる稜線の南端、見晴らしの良い丘の上に位置する。
小古曽 5 丁目 27 番 15 号
東経 136 度 35 分
北緯 34 度 56 分
気圧計の高さ　51.7m
露場の高さ　47.2m



庁舎
1 階　157 ㎡
2 階　304 ㎡
屋階　10 ㎡

この他に官舎 4 戸のほか、充てん室、車庫、ポンプ室が併設されていた。

測候所の跡地を含めた国有地 22,000 ㎡は売却され、平成 24 年（2012）に宅地造成工事が始まった。翌平成 25 年（2013）から入居が始まり、全 67 区画が高塚町自治会に加入している。

メモ　四日市測候所　土地の人の思い出

登山を志す者にとって地図を読むこと、天気図を作成して解析し、天気を予測することは必須の知識である。四日市測候所が開設されたのを知り、四日市山岳協会では所長にお願いして講座を開いてもらった。
月 2 回の講座では、気象概論から始まって、ラジオ気象通報を利用する天気図の作り方、天気図の読み方、それに基づく天気の予測の仕方を教わった。指定された日時のラジオの気象通報を聞いて、天気図を作成して、所長のレクチャーを受ける宿題もあった。所長在任中の 2 年あまりの間の丁寧な指導で、天気図が書けるようになり、ある程度天気の予測が出来るようになった。初代所長に深く感謝するところである。

メモ　赤い風船の思い出

昭和 57 年ごろ、幼稚園へ子どもの送迎時に、測候所から赤い風船が何かをぶら下げて東の空へ飛んでいくのよく見かけた。「パイボール観測」といって、朝 9 時と午後 3 時に飛ばし、上空の風の流れ、強さ、向きなどを計測したとのこと。この気球観測は四日市公害が深刻になりだして設置された四日市測候所の使命だったようだ。あの風船はどこへ飛んで行ったのだろう。

参考文献・資料

・わが町再発見（平成 25 年 9 月　うつべ町かど博物館）
・うつべ歴史覚書（うつべ町かど博物館　未発行）

本冊子は主に上記 2 本の資料に基づいて編集したが、その他下記の資料を参考にした。

・四日市市小古曽町郷土史（昭和 53 年 7 月　小古曽町自治会）
・新視点三重県の歴史（平成 25 年 2 月、三重県史編さんグループ・三重県博物館学芸員）
・四日市市水道五十年史（昭和 54 年 3 月　四日市市水道局）、四日市市水道局資料
・四日市市史第 13 巻・第 15 巻（平成 12 年　四日市市）
・四日市市史研究第 2 号　四日市の陸上交通（平成元年　四日市市）
・四日市の礎Ⅱ　60 人のドラマとその横顔（平成 26 年 11 月　清水雅明）
・四日市測候所のあしあと（津地方気象台資料）
・四日市の気象（四日市測候所気象累年報）（昭和 49 年 3 月　津気象台）
・その他、国会図書館図書検索、文化庁ホームページ「文化遺産オンライン」など
　インターネットからの情報も参考にした。

内部の近代歴史遺産
平成 28 年（2016）9 月
発行　うつべ町かど博物館
編集　稲垣　哲郎